

使徒の働き28章 「継続する宣教」

1A マルタ島の人たち 1-10

2A 兄弟たち 11-15

3A ユダヤ人たち 16-29

1B ローマ兵の監視 16

2B パウロの説明 17-22

3B 福音に別れた反応 23-29

4A 異邦人たち 30-31

本文

使徒の働き 28 章を開いてください。ついに、私たちは使徒の働きの学びを今日で、終えます。しかし、使徒の働き、すなわち使徒たちを通しての、聖霊のお働きは続きます。もし、みなさんよろしければ、ネットで、"Acts29"と検索してみてください。そうすると、さまざまな宣教の働きの紹介サイトが出てきます。お隣韓国のサラン教会でも、私が視聴していたのはずっと前ですが、説教壇の後ろに、Acts29 という標語が掲げられていました。つまり、私たちは使徒の働きの警鐘なのだ。使徒の働きは、今現在も、その教えを聖霊の力で守ることによって継続しているのだということです。

前回までの学びで、パウロたちの乗っているイタリア行きの船が、難破しかけましたが、船は大破したものの、一人の命も失われることなく、島にたどり着くことができました。その後の話が 28 章にあります。そこで冬を過ぎて、ついにローマにたどり着きます。これは、パウロが御霊に示されて、エルサレムに行ってから、ローマに行かなければいけないと示されていて、イエスご自身が、ローマでも証ししなければならぬと、そばに立って語ってくださったとおりのことが確かにそうなったことの現れです。

かつ、イエス様が、昇天される前に約束されたことの実現に他なりません。「1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」いかがですか？ 私たちはじっくりと見てきたので、これだけの時間がかかってしまいましたが、振り返れば、エルサレムで聖霊が降り、そこでイエス様の教えが広がったのが、7 章まで。ステパノの殉教で、ユダヤとサマリアの全土に広がったのが 8 章から 12 章まで。そして 13 章以降は、アンティオキアからアジア、そして欧州に向かう宣教で、「地の果てまで」であります。

そして、ローマは、イエス様が語られたエルサレムからは、「最果て」と言ってよいかもしれません。世界帝国の首都に伝えるということは、世界そのものに伝えると言い換えてもいいでしょう。パ

ウロは、コロサイ書をローマにいる時に書きましたが、「1:6 この福音派、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来、世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています。」と言いました。そして、その世界というのは、今は、もちろん知られている地球上のすべてであります。今も、地の果てにまでイエスを証しする聖霊の力は働いていて、私たちにも働いているのです。

1A マルタ島の人たち 1-10

¹ こうして助かってから、私たちはこの島がマルタと呼ばれていることを知った。

マルタ島というところでした。聖書地図をご覧になれば、そこがイタリア半島の南にあることが分かると思います。イタリアのすぐ南にシチリア島があります。そのシチリア島のすぐ南に、マルタ島があります。現在は、マルタ共和国という一つの国の中にあります。お調べになれば、そこが地中海に浮かぶ美しい島として、有名な観光地になっているのが分かるでしょう。

² 島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。雨が降り出していて寒かったので、彼らは火をたいて私たちみなを迎えてくれた。

この島の人々は、ローマ 1 章 14 節にある「未開の人」と呼んでもよいでしょう。ギリシア語を話さない人々をそう呼びますが、それは私たちが想像するような、原住民ではなく、単にギリシア語を話さない人々を当時、そう呼びました。とは言っても、文明から離れている人々という意味合いは確かにありました。以前、リステラでパウロが、足なえの人を立たせたら、人々が、リカオニオ語で「神々が人間の姿を取って、私たちのところにお下りになった。」と叫びましたね(14:11)。ギリシア語さえ話さない、ローマの施政があまり届いていない所もあり、そこでパウロでさえ、人々に言葉をもって宣教ができませんでした。ですから、ここで島の人々と漂着した人々は、言葉があまり通じない中で、おそらくは、ごく基本的なギリシア語のやり取りであったと思われます。

しかし、ここでも神が働いておられます。パウロは、カイサリアから船に乗る時に、親衛隊の百人隊長ユリウスに親切にしてもらいました。難船した時も、ローマ兵たちが囚人たちを殺そうとしたけれども、ユリウスがパウロを生かすためにそうはさせませんでした。神が、パウロに対する好意を彼に与えていたからです。ここでも、島の人々がとても親切にしているのは、神が背後におられるからでしょう。

そして、この時期が冬であることを思い出してください。冬の季節は地中海は荒れるので航海ができないのに、クレタ島で船出してしまった、ユーラクロンという暴風に巻き込まれました。ですから、まだ冬ですが、それで雨が降り出したら寒かったです。火をたいて迎えてくれました。

³パウロが枯れ枝を一抱え集めて火にくべると、熱気のために一匹のまむしが這い出して来て、彼の手にかみついた。

パウロは、疲労困憊しているだろうに、体を動かして、枯れ枝を集めて火にくべています。彼は、語るに雄弁でしたが、地に足のついた、実際的な人でした。身体を動かす人でした。身体を動かして、神に仕える人でした。彼は自分の手紙で、幾度となく、「Iテサ 2:9 あなたがたは私たちの労苦と辛苦を覚えているでしょう。」と言い、行いで模範を見せてきたことを語っていましたが、それは威張っているのではなく、事実、そうだったのです。

ところが、一つの事件が起こります。まむしが彼の手にかみつきました。

⁴ 島の人々は、この生き物がパウロの手にぶら下がっているのを見て、言い合った。「この人はきっと人殺しだ。海からは救われたが、正義の女神はこの人を生かしておかないのだ。」⁵しかし、パウロはその生き物を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。⁶人々は、彼が今にも腫れ上がってくるか、あるいは急に倒れて死ぬだろうと待っていた。しかし、いくら待っても彼に何も変わった様子が見えないので、考えを変えて、「この人は神様だ」と言い出した。

パウロが、蛇に噛まれても害を受けなかったという、この出来事。何かを思い出しませんか？そうです、イエス様が福音宣教において、これらのしるしが伴うと言われた中にありました。「マル16:17-18 信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばで語り、18 その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば癒やされます。」パウロは、初めの十二弟子ではなかったけれども、確実に、復活された主について言っている弟子、また使徒であることが分かりますね。

ところで、この約束をもって、あえて、蛇でつかむ、あえて毒を飲んでみるみたいなことをする人たちがいるそうです。それは、主を試みることです。主が福音をすべて造られたものに宣べ伝えなさいと命じられた中で、しるしとして与えられると言われた箇所です。事実、宣教地において、毒蛇に遭遇したり、悪い水を飲まなければならなかったり、不可逆的なことに出会います。そして、それでも害を受けずにいるという、しるしは数えきれないほどあります。私の知り合いのご両親は、タイでの宣教師でしたが、ボウフラの浮かんでいる水を飲まなければならなかった時があったそうです。私たちも宣教地で、体内に入れてはいけない物質の入った飲み物を、長い期間、飲んでいました。けれども、害を受けていません。そのようにして、宣教の働きを神は守るし、また人々に、力強い証しとなるのです。

そして、島の人々の反応が興味深いです。パウロが蛇に噛まれたのを見て、「ようやく、海から救われたのに、その後でこんなことになるなんて、だから人殺しだ。」と結論付けています。ところ

が、パウロが害を受けることがないのを見ると、なんと「この人は神様だ」と言っています。これは、天地万物を信じていない、多神教を信じている人々にありがちな反応です。悪いことが度重なるならば、それは呪い、罰(ばち)を受けているのだ。そして、すごいことが起これば、この人は、普通の人間ではない、神さまだ、ということになります。ここまで極端でなくとも、日本人たちにも起こりますね。悪いことが起これば、それは罰があたっている。良いことが重なれば、その人はすごい、となります。

いや、ユダヤ人の中でさえ、ありました。ヨハネ 9 章にあったように、生まれつきの盲人を見れば、それは母の胎の中で本人が罪を犯したか、あるいは両親が犯した罪があるからだとなりました。また金銭的に豊かであれば、それは神の祝福のしるしであるとみなしました。キリスト者の間でも、そのような見方に影響されることはないでしょうか？状況が悪ければ、神からの罰だ。良ければ、その人は霊的に優れているというような。しかし、パウロを見てください。彼は彼で、主に仕えていただけなのです。何も変わっていません。牢に入れられていても、主が共におられたし、毒で害を受けていなくても主が共におられます。どのような状況の中にあっても、変わることがない神を私たちは証しているのです。

⁷ さて、その場所の近くに、島の長官でプブリウスという名の人の所有地があった。彼は私たちを歓迎して、三日間親切にもてなしてくれた。

パウロのこうした姿を見たからでしょうか、パウロ、ルカ、またアリストアルコの一行を、島の長官が歓迎してくれて、親切にもてなしてくれました。

⁸ たまたまプブリウスの父が、発熱と下痢で苦しんで床に就いていた。パウロはその人のところに行き、彼に手を置いて祈り、癒やした。⁹ このことがあってから、島にいたほかの病人たちもやって来て、癒やしを受けた。

マルタ島では、マルタ熱と呼ばれる感染症があるそうです。プブリウスの父はその熱に侵されていたかもしれません。パウロは、主に対して忠実な人です。歓迎されている時も、そこに病の人がいれば、癒しのための祈りを献げます。そして、何よりも、言葉があまり通じない中で、このような行いによる証しを立てることができました。私たちはとかく、すべて福音をしっかりと語らなければ証しにならないと完璧を求めすぎてしまい、すべてを主の御名によって行うことが、宣教につながることを忘れてしまいます。しかし、パウロのように、制限や限界がある中でも、その中で与えられているところで、人々に主の御名によって良い行いをするのです。

¹⁰ また人々は私たちに深い尊敬を表し、私たちが船出するときには、必要な物を用意してくれた。

この島の人々は、純朴で義理堅い人々だったので、癒してもらったので、船出する時の必要なものを用意してくれています。私も思い出すに、東日本大震災の救援旅行に行きました。その時、気仙沼に行きました。救援物資を渡した後で、「また漁ができるようになったら、お返しをしたい」とのことなのです。まあ、感謝のこぼれを言い表してくださっているのだなと思っていただけでした。数か月後、ある日、パソコンの画面を見ていたら、かつおの震災後、初の水揚げのニュースが出ていました。ああ、ここまで復興できているんだと懐かしく、うれしくなりましたが、ちょうどその時に、ピンポン！と鳴るのです。なんと、気仙沼から初の水揚げのかつおが、届いたではありませんか！とても義理堅い方々だと思いました。

2A 兄弟たち 11-15

¹¹ 三か月後、私たちは、この島で冬を越していたアレクサンドリアの船で出発した。その船首にはディオスクロイの飾りが付いていた。

ついに、ローマへの旅を再開できます。「アレクサンドリアの船」とありますが、パウロたちが乗ってきた船とは違うものでしょう。あれは、座礁してしまっていますから。マルタを経由して、エジプトのアレクサンドリアからイタリアに向かう別の船に乗り込みました。船首に「ディオスクロイの飾り」が付いていたとありますが、これは、「ゼウスの双子の子」の意味です。言わば、お守りみたいなもの、守護神です。パウロたちが、いつもそういう異教の環境の中で行動し、生活していたことを思います。けれども、その中で、読者はすでに、パウロたちにいるまことの神が、彼らを守って来られたことを知っています。私たちも、数々ある神々と呼ばれている中で、それでもまことの生ける神に、この人たちは守られてるのだということが、伝わるような証しを残せていけたらと願います。

¹² 私たちはシラクサに寄港して、三日間そこに滞在し、¹³ そこから錨を上げて、レギオンに達した。一日たつと南風が吹き始めたので、二日目にはプテオリに入港した。

シラクサはシチリア島にある大きな港町で、レギオンはイタリア半島の南端にある町です。そこから、プテオリまでは北に360キロメートルも行きます。プテオリは、船がここに来ると、ローマへの荷物はほとんどすべて、ここで降ろします。ところで、聖霊が、私たちの証印であるという言葉が、エペソ書などにありますが、エペソも港町です。その「証印」の意味していることをよく知っています。荷物に、荷主の印章が、まだ固まっていない蠟に押し付け、それが荷物が誰のものを明らかにします。そしてエペソからの荷物が、プテオリに入港します。その時に荷物が自分のものであると主張します。神が聖霊をその証印にしておられるということです。聖霊が与えられているということは、あたかも、プテオリで荷主から自分のものであると宣言されるように、贖いの日、イエス様が戻って来られる日に、主は必ず、私たちをご自分のものと宣言してくださいませ。

¹⁴ その町で、私たちは兄弟たちを見つけ、勧められるままに彼らのところに七日間滞在した。こうし

て、私たちはローマにやって来た。¹⁵ ローマからは、私たちのことを聞いた兄弟たちが、アピイ・フォルムとトレス・タベルネまで、私たちを迎えに来てくれた。パウロは彼らに会って、神に感謝し、勇気づけられた。

プテオリでも兄弟たちのところで滞在し、それから、ローマに向かうとその途中の二つの町で、それぞれローマからの兄弟たちが、わざわざ迎えに来てくれました。彼は神に感謝し、勇気づけられています。なぜローマの人たちがそれほどパウロを慕っているのか、またパウロが勇気づけられたのか、そのことは来週から学ぶ、ローマ人への手紙を見ると良く分かります。彼は、ローマ人への手紙をコリントにいた時に書きましたが、1章でこのように言っています。「1:10-12 祈るときにはいつも、神のみこころによって、今度こそついに道が開かれ、何とかしてあなたがたのところに行けるようにと願っています。11 私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでも分け与えて、あなたがたを強くしたいからです。12 というより、あなたがたの間であって、あなたがたと私の互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」

コロナ禍で、私たちは教会間の交流が減ってしまいましたが、パウロとローマの兄弟たちがこのような絆があったように、私たちも、他の教会の兄弟たち、主の働きをしている人たちとの交わりを大切にしていきたいですね。

3A ユダヤ人たち 16-29

1B ローマ兵の監視 16

¹⁶ 私たちがローマに入ったとき、パウロは、監視の兵士が付いてはいたが、一人で生活することを許された。

パウロは、ローマに着いてから、囚人であるのに特別な待遇を受けることが出来ました。ローマ市民であるということが大きな理由でしょう。実質、自分につながれている鎖を除いては、宿であったり、自費で借りた家であったり、牢獄ではなく、普通に暮らすことができました。ここで、彼は、獄中書簡と呼ばれるものを書きます。エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、そしてピレモンへの手紙です。先に彼は、言葉がなかなかつながらない中でも、それでも証しを立てたように、ここでは、鎖につながれていても、その制限の中で、主にあってできることを行っていました。この四つの手紙がなかったら、今の私たちはどうなったでしょうか？ですから、すごいことです。

それから、前にも申し上げたように、ピリピ 1章を見ると、親衛隊の人たちに福音が広がっています。ここで監視している兵士が福音をずっと聞いているわけですから。鎖につながれているのは、パウロではなく、兵士だったのかもしれない！

2B パウロの説明 17-22

¹⁷ 三日後、パウロはユダヤ人のおもだった人たちを呼び集めた。そして、彼らが集まったとき、こう言った。「兄弟たち。私は、民に対しても先祖の慣習に対しても、何一つ背くことはしていないにもかかわらず、エルサレムで囚人としてローマ人の手に渡されました。¹⁸ 彼らは私を取り調べましたが、私に死に値する罪が何もなかったので、釈放しようと思いました。¹⁹ ところが、ユダヤ人たちが反対したため、私は仕方なくカエサルに上訴しました。自分の同胞を訴えようとしたわけではありませぬ。²⁰ そういうわけで、私はあなたがたに会ってお話したいと願ったのです。私がこの鎖につながれているのは、イスラエルの望みのためです。」

パウロは、同胞に対する自然の愛を持っていたことでしょう。自分は、決してあなたがたに敵対するために上訴したのではない。やむを得ず、そうしたことだ、ということです。

そして彼は、自然の愛だけでなく、霊的に愛していました。つまり、彼らが救われてほしいと願ったのです。これまでのパウロの宣教を思い出してください。まず、ユダヤ人のところに行きました。新しい町に動けば、安息日に会堂に行き、そこでイエス様について論じました。その中にいるユダヤ人も信じますが、多くが拒みます。しかし、改宗者や神を敬う異邦人が信仰を持っています。そしてパウロは異邦人に語り始めます。まず、ユダヤ人に語り、そして異邦人です。

覚えていますか、イエスご自身がそうだったのです。イスラエルの失われた羊のために来たといわれ、サマリアの町に入ってはならないとまで言われました。カナン人の女が娘が悪霊につかれているから、助けてほしいと言うも、「子をさしおいて、子犬にパンを与えるのはよくない」とまで言われたのです。しかし、ユダヤ人たちが拒むので、それで呼ばれていない国民、異邦人に救いが及ぶことを語られました。福音書の中でも、百人隊長、サマリア人、デカポリスにおける五千人の給食など、異邦人への救いもあります。

これが神のご計画だったのです。私たちは次の書、ローマ人への手紙でそのことを詳しく学びますが、パウロは1章から次のように語ります。「1:16 私は、福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」そして、11章において、ユダヤ人たちが拒んだことによって、かえって異邦人に救いが及んだ。彼らが受け入れる時は、まさに死者からの復活のようであると言っています。彼らの失敗さえ神は用いられて、異邦人への救いとし、そして異邦人の救いによって、今度はかえってユダヤ人にねたみを起こさせ、異邦人の救いが完成されたら、今度はイスラエルがみな救われると教えています。

²¹ すると、彼らはパウロに言った。「私たちは、あなたについて、ユダヤから何の通知も受け取っていません。また、ここに来た兄弟たちのだれかが、あなたについて何か悪いことを告げたり、話したりしたこともありません。²² 私たちは、あなたが考えておられることを、あなたから聞くのがよいと

思っています。この宗派について、いたるところで反対があるということを、私たちは耳にしていますから。」

幸い、ローマにまでは、妬みにかかられてパウロに危害を加えたいと願っているような者たちは来ていないようでした。「あなたが考えておられることを、あなたから聞くのがよいと思っています。」と言っていますが、とつても大事な姿勢ですね。世間でも、またキリスト教会の世界でも、他の誰かが言ったことに基づいて判断することが多々あります。本人に尋ねるという事は、とても大切です。

そして、この宗派と言っていますが、そうです、当時はキリスト教があったのではなく、ユダヤ教の中の一派とみなされていました。事実、パウロはそれだからこそ、イスラエルの望みを抱いているとユダヤ人たちに説得していたのです。分かれてしまったのは、その後、いろいろな歴史的な事情があったからです。

3B 福音に別れた反応 23-29

そしてついに、パウロにとって大きな機会がやってきました。ユダヤ人たちが公式に、しっかりと自分の言うことを聞いてくれると言うのです。エルサレムで騒動が起こっている中で語ったのとは違い、パウロに敵対的でなく、公平な見方で聞くと言っているのですから。

²³ そこで彼らは日を定めて、さらに大勢でパウロの宿にやって来た。パウロは、神の国のことを証しし、モーセの律法と預言者たちの書からイエスについて彼らを説得しようと、朝から晩まで説明を続けた。²⁴ ある人たちは彼が語ることを受け入れたが、ほかの人たちは信じようとしなかった。

午前礼拝で話したとおりですが、パウロはイスラエルの望みをそのまま伝えました。ユダヤ人たちは神の国が来るのを切に待ち望んでいました。そしてモーセの律法と預言者に書かれているメシアが来られることを切望していました。イエスがそのキリストであると説得したのです。パウロは復活の主ご自身が行われたことを、そのまま行つたのです。「ルカ 24:27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」あまりにも膨大なところに及ぶので、朝から晩まで説明を続けました。ところが、それであっても、信じようとしなない人たちがいたのです。

²⁵ 互いの意見が一致しないまま彼らが帰ろうとしたので、パウロは一言、次のように言った。「まさしく聖霊が、預言者イザヤを通して、あなたがたの先祖に語られたとおりです。²⁶『この民ののところに行って告げよ。あなたがたは聞くには聞くが、決して悟ることはない。見るには見るが、決して知ることはない。』²⁷ この民の心は鈍くなり、耳は遠くなり、目は閉じているからである。彼らがその目で見ること、耳で聞くこと、心で悟ることも、立ち返ることもないように。そして、わたしが癒やすこともないように。』

イザヤが、主に召されて、遣わされるにあたって、この言葉を言われました。その主な相手は、アハズ王でした。ユダ国の王の中で、最悪の王の一人でした。しかし語らなければならない、ということ。それで、このことが起きているのだとパウロは宣言します。ヨハネが福音書の中でも、ユダヤ人が拒んだことを、ここの預言を使って説明します。「ヨハ 12:39-41 イザヤはまた次のように言っているので、彼らは信じるができなかったのである。40「主は彼らの目を見えないようにされた。また、彼らの心を頑なにされた。彼らがその目で見ること、心で理解することも、立ち返ることもないように。そして、わたしが彼らを癒やすこともないように。」41 イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであり、イエスについて語ったのである。」

しばしば、「こんなにも知識が与えられているのに、ユダヤ人はどうして信じないの？」という質問を受けますが、これが理由です。聞いても受け取らない。見ても、知ろうとしない、ということです。それについて、見ようとしても見えないようになってしまっている、ということです。例えば、ギターを弾いていて、あまりにも弦を指で掴んでいるために、耳にたこができて、無感覚になるように、ユダヤ人指導者たちがあまりにも拒んでしまったので、その見解を歴史の中でずっと聞いてきたユダヤ人たちは、イエスという名を信じなさいとなると、拒否反応を起こしてしまいます。もちろん、その中でも選ばれた人たちは信じていきます。残された者たちです。

けれども、いかがでしょうか？何もこれは、ユダヤ人に限りません。午前礼拝でお話したように、聞いているのに受け入れないと言う問題は、人間全体にもあります。確かな証拠があるのに、自分の在り方、やり方を変えたくないの、それを敢えて受け入れようとしな、拒むということがあるのです。このようにして、同じみことばなのですが、受け入れる人もあれば、そうでない人もでてくるということです。

²⁸ ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らが聞き従うこととなります。」そして、29 節が新改訳聖書の下の引照部分にありますが、²⁹ 彼がこれらのことを話し終えると、ユダヤ人たちは互いに激しく論じ合いながら、帰って行った。」とあります。

先ほど話したとおり、ユダヤ人たちが拒むので、異邦人に救いが送られてきます。ピシディアのアンティオキアの教会でも、同じことをバルナバとパウロが語りました。そして主ご自身が、王子の婚宴の喩え、また畑にしもべや息子を遣わして分け前をもらおうとした主人の話などで説明しました。しかし、それも神のご計画の中にあって、彼らの失敗を使って世界に救いをもたらしています。

4A 異邦人たち 30-31

³⁰ パウロは、まる二年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちをみな迎えて、³¹ 少しもはばかることなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

主に異邦人たちが家にやっていました。パウロは宿に初めいましたが、自費で借りた家に移り住みました。同じように鎖につながれています。けれども、かえってローマ兵によって監視されているから、他の人たちに邪魔されることがなかったのでしょう。妨げられることなく、はばかることもなく、第一に神の国を宣べ伝え、それから主イエス・キリストのことを教えています。

そして初めに申し上げたように、これで終わりではなく、神は、これを聖霊によって続けてほしいと願っておられます。パウロ、また他の使徒たちが、イエスご自身の宣教に従って宣教を行われたように、私たちも倣っていきます。